

世界遺産教育の教材化の視点と実践報告

- 「古都奈良の文化財」と「法隆寺地域の仏教建造物」を中心にして -

田淵五十生

(社会科教育研究室)

谷口尚之

(奈良教育大学附属中学校)

祐岡武志

(奈良県立法隆寺国際高校)

Aspects of Teaching Material to the World Heritage Education and Practical Report
Focusing on Historic Monuments of Ancient NARA and Buddhist Monuments in the Horyu-ji Area

Isoo TABUCHI

(Department of Social Studies Education, Nara University of Education)

Naoyuki TANIGUCHI

(Junior High School attached to Nara University of Education)

Takeshi YUUOKA

(Horyu-ji Kokusai High School)

要旨: 本奈良県には「法隆寺地域の仏教建造物」、「古都奈良の文化財」、「紀伊山地の霊場と参詣道」の3つの世界遺産がある。これは日本では稀有なケースであり、世界遺産教育にとって、非常に恵まれた環境といえる。本稿は附属中学校の谷口と、法隆寺国際高校の祐岡による地域の世界遺産を教材化した実践報告である。それらの実践を通して「世界・地域遺産」教育という新しい概念を提起した。また、身近な地域の文化遺産、将来に残したい地域の自然景観などと結びつける学習過程を組むことによって、地域に世界遺産を持たない学校でも世界遺産教育が可能であることを論じた。

キーワード: 世界遺産教育、世界遺産の教材化、古都奈良の文化財、法隆寺地域の仏教建造物

1. はじめに

世界遺産がブームである。テレビでは毎週、さまざまな地域の世界遺産が放映され、旅行業界も世界遺産を「売り」にしている。海外旅行のパンフレットでは、旅程にいくつの世界遺産を組み込むかが集客の「目玉」になっている。さらに、最近では世界遺産への興味を喚起する「世界遺産検定試験」が登場して7千人を超える受験者があるという。

けれども、世界遺産への熱い観光ブーとは異なり、ユネスコが提起する「世界遺産教育」(World Heritage Education)¹⁾への関心は極めて低く、「世界遺産教育」という用語自体、日本ではまだ「市民権」を得ていない。「世界遺産教育」は、「世界遺産検定試験」準備のための教育ではない。世界遺産を通して文化の多様性に気づかせたり、文化遺産や自然景観を保全する重要

性を認識させたり、平和の尊さや人権尊重の意義を再確認させたりする、市民教育の一端を担う教育である²⁾。

現在、世界各地の世界遺産が危機に瀕しており、2007年12月現在、30サイトが危機遺産リストに登録されている。日本でも2006年、知床が世界遺産に登録されると、観光客が押しかけ、貴重な植物が踏み荒らされ、自然環境が破壊されはじめたという。また、伝統的な合掌造りの白川郷が世界遺産に登録されたことで、静かな集落到土産物店やレストランが立ち並び、まるでテーマパークのような様相を呈している³⁾。

そのような事情は隣国の中国でも同じである。広東省開平市に「開平望楼と村落」という世界遺産が2007年に誕生した。海外で成功した華僑たちが、西洋と中国の建築様式を融合させて故郷に建てた建築群が建ち並ぶ村落である。世界遺産に指定されると、従前まで

ほとんど見向きもされなかった村落に観光客が洪水のように押しかけて、当局は受け入れに苦慮しているという⁴⁾。いわゆる「ツーリズムによる環境、景観破壊」である。

「世界遺産への登録」といえば、観光地の「ブランド化」を推し進めたり、その観光地に「お墨付き」を与えたりするような印象がある。けれども、「世界遺産条約」が結ばれた本来の目的は、経済力の弱い国の文化遺産や自然遺産を守るためのものであった。貴重な文化遺産や自然遺産を、人類の貴重な宝として登録し、そのための「基金」を作って保護しようとしたのである。そのような、「世界遺産条約」にまつわる本質的な理解が得られるだけで、世界遺産は異なって見えてくる。

本稿は、世界遺産を地域に持つ奈良教育大学附属中学校と法隆寺国際高校の世界遺産教育の実践報告である。附属中学校では創立以来、地域の文化遺産へフィールドワークする「奈良めぐり」が行われていた。けれども、2006年度から、世界遺産教育を意識した地域学習としての取り組みが行われようになり、現在では、単なる世界遺産学習ではなく、ESD（持続可能な開発のための教育）の視点からの授業作りが行われるようになってきている。そして、07年度の研究発表会では、「ESDの理念にもとづく学校作り - ESDを視野にいった授業研究 - 」というテーマで、その成果の一端が発表された⁵⁾。

一方、法隆寺国際高校は、学校の独自性を出すために、新たに「歴史文化科」が設置されて、「世界遺産学」という専門科目が設けられ、2006年から、ユネスコの世界遺産教育を意識した授業づくりが展開されるようになった。以下、紹介する二つの報告は2007年、3月23、24日に行われた「ユネスコ東アジア地域世界遺産教育国内ワークショップ」の開催資料として作成された冊子の中身を整理・修正したものである。

まず、世界遺産、「古都奈良の文化財」と「法隆寺地域の仏教建築群」の実践を紹介して、次に実践を振り返って、世界遺産教育の教材化の視点について報告し、「世界・地域遺産」教育の可能性について提案したい。

2. 「古都奈良の文化財」の実践報告

2 - 1. 「古都奈良の文化財」を教材化する意味

「奈良の大仏さん」で知られる東大寺（盧舎那仏）をはじめとする奈良市内の8つの資産が世界文化遺産に登録されたのは、1998年12月、京都で開かれた第22回世界遺産委員会においてである。その8つの資産とは、

「国宝建造物があり、敷地が史跡に指定されている」東大寺・興福寺・春日大社・元興寺・薬師寺・唐招

提寺

「特別史跡・特別天然記念物に指定されている」平城宮跡・春日山原始林である。

周知のように世界文化遺産への登録に際しては、「6つの登録基準」のうち、1つ以上に該当することが求められる⁶⁾。「古都奈良の文化財」については、以下の4つにあてはまる事が認められた⁷⁾。

(ii)「ある期間、あるいは世界のある文化圏において、建築物、技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展において人類の価値の重要な交流を示していること。」

東大寺南大門に見られる大仏様をはじめ、登録された各寺院の建築物のいたる所に、またそれらの寺院が所蔵する仏像や工芸品のなかに、中国や朝鮮あるいはシルク・ロード諸地域との交流の歴史が顕著である。また、平城京の造営にあたっては、中国の都城制に倣ったことはよく知られるところである。

(iii)「現存する、あるいはすでに消滅してしまった文化的伝統や文明に関する独特な、あるいは稀な証拠を示していること。」

古代日本の都に築かれた宮殿の遺跡と、その都に計画的に建設された木造建築群によって往時の姿が伝えられ、またそれらの建造物群と自然の野山や森林が一体感をもった文化的景観が伝承されてきた。

(iv)「人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体、あるいは景観に関する優れた見本であること。」

中国や朝鮮から学んだ政治や文化を、日本の風土の中で昇華させ、国家としての基礎が築かれていった奈良時代の様子を伝える典型となる建築物や景観が見られる。また、兵火等によって失われた建築物などを先人の技術や知恵を継承しながら、新たに中国から学んだ技術も駆使して鎌倉時代に再建された建築物は、その時代の様子を代表するものである。

(vi)「顕著で普遍的な価値をもつ出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または明白な関連があること（ただし、きわめて例外的な場合で、かつ他の基準関連している場合のみ適応）」

日本人の信仰の基盤をなす神道や仏教に密接に関係する建造物や芸術作品群、伝統芸能や年中行事があり、それらの多くが今日も広く人々の暮らしの中に生き続けている。

奈良教育大学附属中学校（以下、本校）は、生徒のうち、約80%が奈良県（その大半が奈良市内）、約15%

が京都府南部、約5%が大阪府東部から通学している。奈良市では、世界遺産登録を機に、ほぼすべての学校で、小学校5年生が1日を使って『世界遺産めぐり(「平城宮跡・薬師寺・唐招提寺」「東大寺・興福寺・春日大社等」に分ける)』を実施している。また他の地域の生徒もそのほとんどが学校の遠足あるいは家族連れで東大寺を訪れたり、平城宮跡に遊んだりする経験を持っている。

その意味では、中学校で敢えて「奈良めぐり」を行う必要はないという意見もあるが、生徒に尋ねてみると、小学校の遠足などで印象に残っているのは「大仏さん」程度で、同じ東大寺にある「三月堂(法華堂)」の諸仏をじっくり拝したことも、戒壇院の四天王像の迫力にたじろいだ経験も持たないのが普通である。南大門の仁王像の大きさに驚いても、その北裏に座す一對の狛犬(石像の獅子)に気づいた者は少ないし、それが南大門の建造にも関わった宋人の手になる国宝であることを知る者は稀有である。これらは、小学校という発達段階を踏まえた指導や、遠足など限られた時間内での学習ではやむを得ないものであろう。しかし、奈良県内の中学校や高等学校で、「古都奈良の文化財」を実際に見学しているかといえば、あまりにも身近にありすぎて、「学校からわざわざ見に行く対象」にはなっていないのである。

本校では開校以来、奈良市内およびその周辺の文化財について現地見学する学習を進めてきた。上述したように、「古都奈良の文化財」は奈良の子どもたちにとって「近くて遠い世界遺産」になっている。これをどのように学ばせてきたのか、ここでは、「奈良めぐり」の取り組みの概要とその一例を紹介したい。

世界遺産に登録された8つの資産をはじめ、それらの寺社が所蔵する仏像等の文化財は、千年を越える長い歴史の中で、自然災害や兵火、あるいは廃仏毀釈の嵐のなかで幾度も喪失の危機に直面してきた。けれども、その時代の人々の努力と知性によって守られ、受け継がれて現在に至っている。第二次世界大戦中、日本の諸都市が空襲に見舞われるなか、奈良が京都とともに致命的な被災を免れた(空爆が皆無であったわけではない)ことも、これら貴重な文化財が今日に継承されている重要な要因である。

2-2. 実践の概要

「奈良めぐり」の狙いは以下の通りである。

奈良県内や県外の自然や産業、人々の暮らしなどの様子や地域の課題などを直接見聞させ、地域の発展につくそうとする態度を育てる。

奈良県内をはじめ、京都や大阪などの主な文化財を直接見聞させ、文化財に対する理解と関心を深めさせるとともに、日本史や世界史との

関連をつかませる。

文化財保存の現状を直接見聞させ、文化財を愛護し尊重する態度を育てるとともに、新しい国民文化を創造しようとする能力や態度を養う。

地域の自然や産業、文化財などを研究したり発表したりする能力を養うとともに、研究や見学などを通じて責任感や協調性を養う。

ここには、文化財を直接見聞させることによって理解と関心を深めさせ、文化財を保護し尊重する態度を培うだけでなく、地域の文化財を学ばせることを通して日本史と世界史との関連に視野を拡大させようという狙いがある。また、世界遺産学習の重要な狙いである、どの文化も孤立してあるのではなく、他文化の影響を受けて文化が構成されるという「文化の融合性」や「文化の重層性」に気づかせる国際理解教育の狙いも存している。

下表は、1977年以降、ほぼ定着した見学先を示したものである。

	1 (4)	3 (2)

「奈良めぐり」の教育課程における位置づけは、学習指導要領の改訂に伴って、改編されてきたが、1977年からは「学校裁量の時間」、現在は「総合的な学習の時間」に組み入れている。また事前・事後の学習では、おもに国語科や社会科の教科時間を活用する機会が多い。

次に、「奈良めぐり」の一例として、第1学年の冬のフィールドワークを紹介したい。

2-3. 「第1学年冬の奈良めぐり～世界遺産・古都奈良の文化財「東大寺」を訪ねて～」学習計画

(1) 学習のねらい(「見学のしおり」から)

奈良時代から鎌倉時代の文化財の宝庫として、世界文化遺産にも登録されている東大寺について、その寺域を自分の足で歩いて壮大な伽藍配置を確かめ、建造物の特徴を学び、諸仏のもつ深遠な美にふれる。

班分け、見学コースの立案、当日の班別見学など、すべての活動を通してクラスのなかまとの交流を図るとともに、規律ある団体行動のルールを身につける。

(2) 学習の流れ

【事前学習】

< 社会科 >

..... 「東大寺クイズ」(小学校での既習知識の確認)
 現地での社会科の課題 (資料) についての
 説明とDVD視聴

< 国語科 >

..... 現地での国語科の課題 (文学の中に登場する
 東大寺) についての説明

< 各学級 >

..... 東大寺境内の見学ルートを班で討議し決定

< 学年集会 >

..... 実施要項にもとづいて当日の動き等を確認

【現地見学の流れ (見学のしおり資料から)】

「世界遺産・東大寺」をマスターしよう

奈良の人にはなじみの深い“ 大仏さんのお寺、東大寺 ”。社会見学などで一度は訪れたこともあるはず。しかし、大仏殿と南大門以外のお堂をめぐり、その中の仏を丁寧に鑑賞した人は大人でも意外と少ない。少しの予備知識と旺盛な知識欲で、世界遺産の東大寺を完全マスターしてください。

【Timetable】

8 : 45 東大寺講堂跡に集合・点呼 移動
 南大門をくぐり、大仏殿を回り込んで
 その裏 (北) 側です
 9 : 00 ~ 9 : 45 全員で大仏殿内見学
 ・毘盧舎那如来 ・台座と蓮弁の線刻図
 ・殿内の復元模型 ・八角燈籠
 9 : 45 大仏殿出口 (鏡池前) から班活動開始
 ・班で行動し、予定のコース順に回る
 ・「三月堂」「戒壇堂」は堂内に入ること
 その見学は11 : 30までに終えること
 11 : 45 ~ 12 : 00 講堂跡に再集合
 集合時には、
 社会科の「グループ課題」「個人課題」
 と国語科の課題を提出すること。

オリエンテーリングの要領で、途中グループや個人の課題をやりながら、東大寺の各ポイント (お堂や門など) を巡ってもらいます。

次の4ヶ所には先生がおられますので、班員そろってチェックを受け、それぞれで出題される問題に答えてもらいます。

転害門 (先生)
 戒壇堂 (先生)
 三月堂 (先生 ・ 先生)
 南大門 (先生)

* 講堂跡・巡視..... 先生

【事後学習】

< 社会科 >

..... 班および個人の課題の整理
 チェックポイントでの問題の解答と解説

- 社会科の課題 (資料) -

【個人の課題】

大仏殿内でのお寺の方によるお話をしっかり聴き取りメモを取ること。

盧舎那仏の台座に刻まれた線刻画をじっくり観て創建当時の「大仏さん」の姿を思い浮かべること。

大仏殿内の「東大寺創建時の復元模型」を観て、創建当時の大伽藍の様子を確かめること。

大仏殿正面の「青銅八角燈籠」をよく見て、次のことを確かめること。

- ・火袋の各面に刻まれた「音声菩薩」の様子 ~ 表情や手にする楽器など ~
- ・この燈籠は、全体にどんな「色」に見えましたか。..... [] 色

今から4,50年前には黒灰色や濃緑色・濃青色の落ち着いた色合いだった燈籠が、今のような「色」になった原因は何だろう？

次に挙げる仏像の中から一体を選んで、「文章によるスケッチ*」をきなさい。

< 三月堂 (法華堂) >

..... 不空羂索觀世音菩薩像、日光菩薩像または月光菩薩像

< 戒壇堂 (堂) >

..... 四天王像 (持国天・増長天・広目天・多聞天) のうち一体

< 南大門 >

..... 金剛力士像 (吽形または阿形)

* 興福寺の阿修羅像を例に、その仏像の姿を細部にわたって短文で記録する方法を示している (略)

【班の課題】 当日、解答用紙を班ごとに配布

建物の「屋根」の形に注目してみましょう。次の建物の「屋根」の形は、下のア~エのどれにあたりますか。実際に自分の目で見て確かめよう*。

- (1) 大仏殿 [江戸時代]
- (2) 南大門 [鎌倉時代]
- (3) 三月堂正堂 (本堂) [奈良時代]
- (4) 三月堂礼堂 [鎌倉時代]
- (5) 転害門 [奈良時代]

ア . 切妻造 イ . 寄棟造
 ウ . 入母屋造 エ . 宝形造

* 説明文と図で上記ア~エの様式を示している (略)

次の各問いに答えなさい。

- (1) 東大寺の梵鐘 は752年、東大寺の創建時に鑄造されたものですが、これを吊している鐘楼は

1210年に建立されたものです。大仏様と唐様を取り混ぜた独特の姿を見せるこの鐘樓を建てた、臨濟宗の開祖でもある僧は？

*鐘樓の中の西南隅の説明板に答えがありますよ。

- (2) 鐘樓の西にある俊乗堂には、東大寺再建の大功労者が祀られています。その僧の名は？
- (3) 三月堂入口の前にある「三月堂経庫」は何造りの建物か。
- (4) 二月堂に上がる階段の南側に、芭蕉の有名な句を刻んだ碑がある。その句を書きなさい。
- (5) 二月堂の下にある小さな建物の中には「若狭井」という井戸がある。その名前がつけられている理由を答えなさい。

【家に帰ってからの課題】

東大寺をふくむ「古都奈良の文化財」は、世界遺産の登録基準の内、次の4つに適合するということで登録が認められました。今日、見学し学んだ中で、その基準に則したものを発見したり、感じたりすることはできましたか。それぞれの基準に関係すると思った事がらをできるだけ挙げてみましょう。

「古都奈良の文化財」は、いわゆる「危機遺産」には指定されていません。しかし、東大寺をはじめとする奈良の文化財に、“心配なこと”は本当に何もありませんか。今日、見学して学んだことや感じたこと、あるいは日ごろから感じている“危機”について、あなたの考えを教えてください。

2 - 4 . 実践の成果と課題

以上のように本校の「奈良めぐり」は、きわめて教科色の強い、教授的な手法による実践である。その文化遺産の持つかけがえのない価値や、それらがいま私たちの前に存在するために幾多の人々が心血を注いで守り抜いてきたかという事実を理解させることが、人類の貴重な宝物を次世代に受け継ぐための根底に必要であると考えからである。

共同執筆者の田淵がいう「世界遺産についての学び (Education about World Heritage)」については、こうした学習形態が基本となる。

しかし一方で、ホリスティックな学びが求められるESDを視野に入れた世界遺産教育を考える場合、本校の実践に対して若干の課題があろう。田淵が主張する、もう一つの柱である「世界遺産を通した学び (Education through World Heritage)」の視点に至っていないことである⁸⁾。他文化との比較を通して文化の交流や融合・重層性に気づかせる国際理解・異文化理解や、世界遺産を通して、平和・人権教育、環境教育へ発展させる展望が十分に見えないことである。そのためには、教科の枠を越えた教員間の協同による教材作

りや多様なアプローチが工夫されなければならないであろう。

最後に、中学校段階で世界遺産を教材化する場合、「危機遺産」について考えさせる学習が必要なことを強調しておきたい。現在「危機遺産」に指定されている世界遺産が30サイトある。それらが、世界のどの地域に集中し、それぞれどのような「危機」が迫っているのか、保全に努力する人々がその危機とどのように向き合っているのか、同様の危機が日本の世界遺産にも迫っていないのか等々の認知的な学習が求められる。そのような学習過程を組み込めば、「私たちにできることは何かないのか」という当事者意識の涵養につながる実践的な学習課題が生徒たち自身の間から出てくる筈である。これは、我々の今後の課題であり、教材開発していきたいテーマである。

3 . 法隆寺地域の仏教建造物の教材化の視点と実践報告

3 - 1 . 「法隆寺地域の仏教建造物」の教材化の視点

「法隆寺地域の仏教建造物」として指定された遺産は、法隆寺（西院伽藍と東院伽藍）に属する47棟の建造物と法起寺の建造物（三重塔）1棟を合わせた48棟である。中には、現存する世界最古の木造建築物11棟が含まれているほか、いずれの建造物も以下のような芸術性を有している点で、高い遺産価値が認められている。

建築様式の多くに同時代の大陸文化の影響が見られ、特に、7世紀から8世紀の日本と諸外国の間の活発な文化的交流を窺わせること。

7世紀から19世紀に至る各時代の優れた木造建築物が一つの地域に集中して残されていること。

日本の仏教史に多大な影響を与えた聖徳太子ゆかりの建造物であること。

法隆寺の独自性は、7世紀に建造された寺院が千年以上を経て、現代に伝わっていることである。これは、特に聖徳太子信仰に関わることが大きい。

法隆寺は聖徳太子が建立した寺院を起源とする。622年に太子が亡くなり、その一族も滅亡した後、太子創建の法隆寺も焼失した。やがて法隆寺は現在の西院伽藍の場所に再建される。一方、太子の住まいであった斑鳩宮も荒廃していた。それを悲しんだ行信律師が、739年にその地に夢殿を建立したのが現在の東院伽藍の始まりである。その後、平安時代に、太子の創建した西院部分と夢殿の東院部分が一つになり、法隆寺は復興されていく。同時にその業績を描いた伝記や絵画によって、太子は神格化され信仰の対象となる。天台宗の開祖最澄は自らを太子の子孫と語り、弘法大師空海や藤原道長も、太子の生まれ変わりとして信じられた。後世に神格化された聖徳太子への信仰こそが、法隆寺を

今日まで伝えた大きな理由である。

今回の実践では“World Heritage Educational Resource Kit for Teachers”の「観光の視点」と「環境の視点」を取り入れ、地域のアイデンティティの形成について生徒に考えさせることにする。「観光の視点」では、奈良県がまとめた観光客数のグラフから、斑鳩地域（法隆寺地域の仏教建造物）の観光客が減少していることを問題提起とする。「環境の視点」は、議論の中で生徒が斑鳩地域の環境に関わる問題にふれ、世界遺産を含めた地域の今後のあり方を考えることである。これらの議論が、生徒による地域のアイデンティティ形成の一助となる。

3 - 2 . 実践 (学習) の概要

この授業は、ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) 文化遺産保護協力事務所 (奈良) が主催する「世界遺産教室」を本校で開催したときの一部である。ACCUは1999年、文化庁や奈良県・奈良市の協力を得て、古代文化の発祥地であり文化財研究の中心である奈良に、文化遺産保護事務所を開設した。

この事務所は、アジア太平洋地域での文化遺産保護活動のための情報センターとしての役割を果たすとともに、ユネスコやICCROM (文化財保存修復研究国際センター) などの国際機関と連携しながら、各国で文化遺産保護に従事する専門家を対象に、遺跡や建造物の保存・活用技術などについての人材養成事業を実施している。

その事業の一環として、身近に3つの世界遺産が存在する奈良県の高校生を対象に、文化財保護の意識を啓発することを目的として、世界遺産を題材に実施する授業が「世界遺産教室」である。この「世界遺産教室」の講師を務めるのが、久保美智代さんである。彼女はフリーのアナウンサーであるが、世界70カ国をまわり、自分で多くの写真を撮っている。その自前の写真を使いながら、自身が世界遺産を訪れた体験を直接生徒に話して聞かせるため、説得力がある。今回の授業は、久保さんから提供いただいた資料を基にして教材開発を行なった。

法隆寺国際高校では、「まほろば創生・なら教育特区」の制度を活用し、体験学習や臨地学習を取り入れた特色ある専門科目を設定している。本実践は法隆寺国際高校の前身である斑鳩高校歴史文化コース第3学年で設定されている専門科目「世界遺産学」で行った。

「世界遺産学」は、教育課程の改編により、本年度から新たに設定された専門科目であり、法隆寺国際高校の歴史文化科の3年生でも実施される予定である。この科目の目的は以下の通りである。

世界遺産の分類や認定の基準、その保護等世界遺産に関する基本的な概念を学び、また、世界各地の代表的な世界遺産について具体的に取り上げ、

それぞれの世界遺産としての価値等存在意義を考えるとともに、世界各地の世界遺産を比較的文化的に学習することによって、文化の多様性について理解し、国際的視野を培う。

3 - 3 . 学習計画

単元のねらい

世界遺産をとりまく観光の問題を、奈良の世界遺産を通して考えさせる。

斑鳩地域への観光客数が減少傾向にあるデータを示し、どのような対策が必要か、生徒の視点から議論させる。

奈良の世界遺産のひとつである「法隆寺地域の仏教建造物」の実態について学習する。

主な学習活動	学習への支援
1. グラフから考えよう。 世界遺産になれば、観光客が増えるはずですが、逆に減っているところがあるのを知っていますか。 グラフを見てください。 〔グラフ〕出典：「21世紀の観光戦略」(奈良県観光課 2006年)	観光客が減るという予想外の質問に、生徒は戸惑う。関心を高め、話し合いを活性化させる。

奈良県以外の地域

<p>答えは「斑鳩 (法隆寺地域の仏教建造物)」です。</p> <p>なぜ「斑鳩」地域の観光客が減っているのだろうか。</p> <p>このままでいいのだろうか。自分の意見をまとめて発表してみよう。(意思表示カードで自分の立場を示した上で、意見を発表する。)</p> <p>話し合いの中で、自分の考えに変化はありましたか。(意思表示カードで自分の意見を示す。)</p> <p>今後、自分達が地域の世界遺産とどのように関わっていきますか。</p>	<p>身近な世界遺産だけに、生徒の驚きが予想される。疑問を引き出し、様々な意見を出しやすい雰囲気を作る。</p> <p>「斑鳩」地域が抱える問題点を話し合わせる。</p> <p>観光客が減っていることを肯定的に考えるか、否定的に考えるかを根拠と共に述べさせ、話し合いに展開する。</p> <p>両方の立場で意見交換することで、相手の考え方についても理解を示せるように促す。</p> <p>再度、自分の考えをまとめさせ、意見の変化の動向を把握する。</p> <p>世界遺産の将来は、生徒の行動に負うところが大きいことを自覚させ、地域の遺産との関わりの大切さを考えさせる。</p>
---	--

3 - 4 . 実践の成果

生徒は、自分の意見を意思表示カード（表が青、裏が赤のカード）で表し、教師や他の生徒と意見交換する。以下は、その授業中の教師と生徒の話し合いの様子をまとめたものである。

議論

教師 1	なぜ「斑鳩」地域が減っていると思う？
生徒 1	リピーターがいないから。
生徒 2	法隆寺しか見るものがないから。
生徒 3	京都はたくさんの寺院があるから、また行きたくなる。
生徒 4	大阪のUSJのように、他のところで面白いものが増えてきた。
生徒 5	名物になる食べ物がないとか・・・。
教師 1	お祭りやイベントはないのか？
生徒 6	あるけど、地域だけのイベントでしかない。

議論

教師 1	否定的な意見が多いけれど、法隆寺は好きではないのか？
生徒 1	きらいではないが、近すぎてあたりまえになっている。
教師 1	このままでいいのかどうか聞きたい。このままでいいという人はカードの「青」を、このままでよくないという人は「赤」を出してください。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">生徒がカードを提示</div> 赤のほうが多いが、青も目立つ（約60% が赤）
生徒 7	「青」：人が来なくても法隆寺の価値は変わらない。
生徒 8	「赤」：法隆寺のすごさ（世界最古の木造建築物）を、いろんな人にPRしていきたい。
生徒 9	「青」：人がたくさん来ると、ごみや車などの問題が起こる。
生徒 10	「赤」：世界遺産だからもっといろんな人に来てもらいたい。

議論

教師 1	どうすればよくなるか。
生徒 11	交通の便を良くする。
生徒 12	駅のバリアフリー化。
生徒 11	斑鳩町の都会化をすすめる。法隆寺以外にも楽しめるものをつくる。
教師 1	法隆寺の景観にあう楽しめるものは何？
生徒 12	ショッピングモール。
教師 1	なるほど、買い物にも来てくれる。
生徒 13	もう手遅れだ。まわりに家が多すぎて手が付けられない。見栄えが悪い。
生徒 6	僕もそう思う。駅の改造くらいしかない...

議論

教師 2	世界遺産は見せるようにしなければならぬ。奈良町みたいに資本を入れて、それらしい町並みをつくって見せていく必要がある。私も嫁さんとのデートでは来た、子供ができてからは行くことはない。雰囲気づくりと、子供が楽しめるものをつくる両面で取り組む必要があるのでは？
教師 1	日本では、すぐに新しいものに立て替えるが、ポーランドのワルシャワでは、ナチスに破壊されてから、昔の絵をもとに、昔の町並みを再現した。破壊されたから、もう新しいものが建ったから、もうこれでどんどん景観が破壊されるのを待つしかないのか？これから、新しい家を建てるときに、景観に配慮した家をみんなが建てようとするのかは、“フューチャー”だ。
生徒	“フューチャー”？
教師 1	変えられるということ。これからつくっていけるのは我々だ。魅力的な町に作り変えていくことも可能性としてできるのではないか？
生徒	そうですね。
教師 1	これは答えがないということ。これからの世界遺産はみんなの手にかかっているということだ。我々しだいでどうにでもなるものなんだね。
生徒	こういう難しい問題を話し合えてよかった。

議論 では、斑鳩地域の問題点を挙げることで、観光地としての特質を考えている。しかし、生徒の視点では、観光地として楽しめるかどうかだけが判断の基準になっている。

議論 では、生徒の中で葛藤が見られる。法隆寺の素晴らしさを多くの人に知ってもらいたい、ごみや駐車場・交通などの問題にも視野が広がってきている。

議論 では、これから何ができるかに議論が広がっている。交通面や地域の整備に議論が及ぶ中で、地域の環境について考えることになっていく。

議論 では、これから何ができるかが、我々に委ねられていることに気づく。地域と直接関わるのは自分自身であることを認識することで、世界遺産も観光の対象物ではなく、自分達のアイデンティティの一部として考えられるきっかけとなっている。

このように、観光問題を話すことから、地域の環境問題について生徒は考えを広げていく。最後は、地域

のアイデンティティを保ち、創造していくのは自分たちであることを自覚していった。これが今回の実践の大きな成果である。また、議論の中では「生徒7」のように、世界遺産を守るためには、観光客の増加を望まない意見が多かったことも注目される。世界遺産として注目される必要を感じている一方で、生徒は身近な地域が静かな環境の中で維持されることも期待している。生徒たちがこのような意識を持っているのは、臨地研修によって、法隆寺や法起寺など斑鳩地域を学習する取り組みがあったからだと考える。冬の法起寺の凜とした空気の中で、きれいに掃き清められた砂利を最初に踏みしめる感覚を生徒と共有できた経験は、私にとっても忘れられないものとなっている。

3 - 5 . さらに発展させるために

今回の授業はあくまでも教室での議論が中心となった。斑鳩地域の観光客数減少の問題について、斑鳩町役場や法隆寺の関係者、あるいは地域住民の方々にインタビューして、その意見を取り入れることで授業に広がりを持たせることができる。

本実践は世界遺産である法隆寺や法起寺に、学校から徒歩で行ける恵まれた環境で実施したものである。しかし、身近な地域に世界遺産がなくても、地域の文化財や自然環境を、「観光」や「環境」の視点から取り上げることができよう。また、小学校や中学校でも、同様の視点で子どもに話し合いをさせることも可能であろう。

地域がかかえるメリットとデメリットを切り口にすることで、授業のネタになる。世界遺産をテーマにする授業であるとはいえ、世界遺産について教えるのだけではなく、世界遺産を通して自分たち自身の地域を見つめなおす授業があっても良い。

4 . 「世界・地域遺産」教育という視点

世界遺産「古都奈良の文化財」と「法隆寺地域の仏教建造物群」についての「教材化の視点」と「実践報告」を紹介してきた。二つの実践を通して、世界遺産の教材化の重要な視点が明らかにされている。

2節の「古都奈良の文化財」の谷口の実践報告では、「近くて遠い世界遺産を身近に感じさせるために」、ツーリズムによる環境破壊や景観破壊が進行して、危機遺産に指定された他の世界遺産の学習を通して「同様な危機が日本にも迫っていないか」と問いかける学習を提起している。

3節の「法隆寺地域の仏教建造物群」の祐岡の実践報告も、「本実践は世界遺産である法隆寺や法起寺に、学校から徒歩で行ける恵まれた環境で実施したものである。しかし、身近な地域に世界遺産がなくても、地域の文化財や自然環境を、『観光』や『環境』の視点

から取り上げることができよう」と指摘している。

ここで「世界遺産教育」についての概念に検討を加えておきたい。それは、「世界遺産教育は世界遺産がある地域では可能かもしれないが、世界遺産のない地域では困難である」という謬見である。谷口が指摘するように、事態はむしろ逆なのである。世界遺産のある地域の子もたちには、その世界遺産があまりにも身近で当たり前過ぎて、客観的な価値に気づかない傾向が強い。したがって、一旦、他の世界遺産を迂回路にして自分たちの地域の世界遺産を見つめ直す学習過程が求められる。「比較の対象」を持って、「地域を相対化」する過程が必要なのである。

また、世界遺産がない地域でも、世界遺産教育は可能である。それは、一つの世界遺産について学習を深め、自分たちの地域に視点を転じさせる学習過程を組み込むことによって可能となる。世界遺産に登録されていなくても、優れた文化遺産や美しい自然環境はどの地域にも存在している。祐岡が指摘するように、「私たちの町の世界遺産は」というテーマで、地元の文化遺産や自然遺産をケーススタディにし、それらの価値に気づかせる学習はどの地域でも可能であろう。「将来に残しておきた地域の自然景観は?」、「私たちの街の誇りの文化遺産は?」という問い掛け(視点)を通して、地域へのアイデンティティを育む地域学習へと発展させることができる。

このように、学習者が地域を対象化して真剣に学ぶ時、地域は豊かな教育力を発揮する。地域に根ざし、地域に拘った学習を深化すれば、その成果は地域を突き抜けグローバルな地平に到達することができる。ローカルに拘る学習がグローバルな学習課題に繋がり、グローバルな学習課題をローカルの現実と結び付ければ、世界遺産教育はリアリティを持つものになるはずである。

<参考文献>

- 1) "World Heritage Educational Resource Kit for Teachers" (Published by UNESCO 1998)
- 2) "MTT Project Teacher Education and Training on World Heritage Education Teacher Education for Sustainable Development through ASP net, East Asia Trainers' Guide on Integrating ESD into WHE" (Published UNESCO Bangkok 2007)
- 3) 日本ユネスコ協会連盟編 『危機にさらされている世界遺産リスト』『UNESCO世界遺産年報』2006 平凡社
- 4) 朝日新聞 「世界遺産の足元で」12月3日 朝刊大阪本社版
- 5) 奈良教育大学附属中学校 『ESDの理念にもとづく学校づくりーESDを視野に入れた授業研究』(奈良教育大学附属中学校 研究集録 第36集)2007
- 6) 小学館 『ビジュアル・ワイド 世界遺産』2003・(小学館p.1 - 2)

- 7) 鈴木嘉吉 田中琢 西川杏太郎監修 木村博一 本中眞 執筆 『古都奈良の世界遺産』奈良市1998
- 8) 田淵五十生 中澤静男「ESDを視野に入れた世界遺産教育 - ユネスコの提起する教育をどう受けとめるか - 」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』2007